

## 44年前の光害反対運動に奔走された 箕輪敏行先生

小川誠治（川崎天文同好会、渋谷星の会）



箕輪敏行先生（1918-2014）

### 1. 1971（昭和46）年とそれ以降のこと

箕輪敏行先生（1918-2014）は、1971（昭和46）年頃、星野写真を撮影中に、空を時々走るサーチライトに気がついた。星仲間に連絡したところ、撮影の邪魔で皆さん困っているという。当時は、ボウリングブームで各地にボウリング場が出来て客引き競争が激しく、何とか目立とうと建物の屋上からサーチライトを空に向かって照らしていた（図1）。

箕輪先生は同年10月22日付朝日新聞「声」欄へ「星空くらすサーチライト」と題した投稿を行った。プロを含む全国の星仲間から反響があり、消灯運動を行うことを決意した。



図1 川崎側から見た、多摩川の向うの二子玉川付近のボウリング場の回転サーチライト

1972（昭和47）年4月2日、15団体の代表者が集まり、名称を「日本星空を守る会」として、青木正博会長、箕輪事務局長らを選出して、環境庁へ陳情書提出を決めた。実はこの年、母彗星であるジャコビニ・チンナー彗星の回帰に伴って、10月8日から9日にかけて過去のような大流星雨が見られるのではないかという期待があり、そんな時にサーチライトは観測の邪魔だというのが反対の大きな背景であった。

同年5月24日午前中に、大石環境庁長官への陳情を行った（図2）。長官は終始ニコニコしていて、陳情書を受け取り「必ず善処します。」と返事をくれた。

そして、この日の午後は、日本天文学会の総会会場へ移動した。青木会長があいさつし、箕輪先生が趣旨と経過を説明し、「アマ・プロが一体で光害と闘わなければなりません」と訴えた。ところが、議長からは「趣旨は良く分かりました。我々も一緒にやります。ですが、我々の多くは公務員です。だから市民運動の真正面に立つより側面からアマチュアの運動に協力していきます。」旨の発言をされた。

この議長発言に箕輪先生は「かつとした僕は、表面は荒い発言では無かったが、かなり熱っぽい口調で反論した」そうだ。その時の先生の心境は、「何だと、公務員だから真正面に立てないって。しゃらくせえ、そんなことをいうなら、俺だって公立学校の校長で地方公務員だぞ。この問題は俺たちアマの問題よりも、むしろ美しい星空で研究して、そこに生活の場を求めている学者先生の死活問題ではないか。」箕輪先生が熱く反論したところ、会場からは嵐のような賛成の拍手が鳴り響い



図2 大石環境庁長官への陳情の一場面  
右から大石長官、青木正博会長（長野県在住のアマチュア天文家）、森久保茂氏（川崎天文同好会の創立者のひとりで、流星塵の観測家。本職は医師）、一人おいて東京天文台の下保茂氏。  
写真：箕輪敏行『かんさつ手帖』（昭和63年11月3日、自費出版）252ページから。

た。この時のことはいまだに語り継がれる、箕輪先生の有名な伝説のひとつだ。

同年7月29日には、第1回光害防止全国大会が開かれた。当時の古畑正秋東京天文台長が挨拶し、また日本天文学会も環境庁へ8月1日陳情書を提出する等、アマ・プロが一体となった光害反対運動の体制が整った。

こうした地道な運動が徐々に広がり始め、新聞各紙も、「このライト消してください」（9月29日読売新聞朝刊、図3）など、サーチライトの弊害を大きく報道し始め、世間の関心を集めた。前後するが、8月19日には日刊スポーツまでが紙面を割く様になった。

全国から署名が続々と集まってきたので、守る会では10月3日、小山環境庁長官に再び陳情した。これを受けて、なんと閣議で「ネオン光害自粛」の異例の申し合わせが行われた。並行して、ボウリング場からも「一夜限りの消灯」を約束する文書が届くという成果があがった。

いよいよジャコビニ流星群の極大日である10月8日がやってきて、日本中が空を見上げたが、流星はほとんど飛ばなかった。

待望のジャコビニ流星はほとんど空振りであ

あったが、全国のサーチライト始めネオンが一切消えた。その後、夜空は再び輝きだした。箕輪先生にはまだ大切な仕事が残った。連日各地から集まってくる署名のチェックは川崎天文同好会の同人が交代で行い、深夜まで及んだ。1973（昭和48）年5月10日、全国の星仲間の熱い心が宿っている約2万5千人の署名を持って、三回目となる環境庁へ陳情に行った。

1973（昭和48）年10月6日に勃発した第4次中東戦争のあおりを受けて、いわゆる「石油ショック」が起きた。その後、石油ショックはひどくなり、各地のボウリング場はサーチライトを消し始めた。「我々の力よりも石油ショックのおかげとは何と皮肉なことだろう」と箕輪先生は自著である『かんさつ手帖』で述べておられた。

その後、1984（昭和59）年夏、青木正博会長が急逝という事態を受けて、同年12月16日、諏訪で青木さんを偲ぶ会が行われ、席上日本星空を守る会の最終決算と解散声明を行った。わずか11万円余りの会計で、あれだけ大きな仕事が出来たのは関係者の熱意とボランティア活動の賜物であろう。



図3 読売新聞（1972年9月29日）より

## 2. 後日談

この物語には後日談がある。時はまた流れ、1997（平成9）年頃、ヘール・ボップ彗星が明るくなると予想されていた。

1996（平成8）年9月24日、箕輪先生を始めとする川崎天文同好会の代表は、岩垂寿喜男（いわたれ・すきお）環境庁長官に、ヘール・ボップ彗星の観測に備えて、光害自粛、ライトダウンキャンペーンを要請した。実は、岩垂長官は1972（昭和47）年に環境庁へ陳情書を提出した際の紹介議員だったので、話が進むのも早かった。

岩垂長官は、長官として各地を視察された際に、原稿なしで「1972年のジャコビニ流星群の時は残念だったが、光害は環境庁と皆さんが連携して対応していこう」などと挨拶した。そのため、全国の天文ファンから「今度の長官は星のことに詳しいぞ。ジャコビニなんて良く言える」など大変評判になった。環境庁自ら、ヘール・ボップ彗星を見るためにライトダウンを呼び掛けたのだ。箕輪先生の運動が24年後に花開いたといえる。

手前味噌で自慢話のような余談で恐縮だが、岩垂長官が長官を退任された後、川崎駅前でもバッタリ出会った。岩垂さんは言うのだった：「1972年の総選挙前に、小川さんから『あなたも環境問題に取り組むなら、まずジャコビニ流星群の光害のことから取り組むべきだ』と言われてね。会うたびに、『ジャコビニ流星群、ジャコビニ流星群』と耳にタコが出来るくらい聴かされて、ある時彗星とか流星とか星のことをたっぷり講釈してもらった。実はこれが長官になって大変役に立ったんだよ。どうも有難う。」そんなことを言ったことすら、すっかり忘れていた私は大変びっくりした。

晩年の箕輪先生に会うたびに、回転サーチライト反対運動について、特に天文界にとっての大恩人、岩垂寿喜男環境庁長官の昔話をした。現在ではどんな政治家も、環境を公約

に取り上げる。しかし、1972年頃は、環境問題を演説する政治家など一人もいなく、演説ただけで岩垂さんも「生産性を阻害する」とか「経済との調和を考えろ」、「開発に反対するのか」とか言われ、我々まで「営業妨害をするな」等と批判されたものだ。子孫のためにも環境保護にまい進し、我々天文界の味方となって、大石長官を党派が違うのに助け、その後自然環境保護議員連盟を立ち上げて、歴代内閣や議員、官僚たちの啓発や緑や自然環境を守る運動に真摯に取り組んできた足跡を忘れてはならない、と強調しておられた。

## 3. おわりに

回転サーチライト反対運動中に、情報、署名、問い合わせなどが全国から寄せられ、箕輪先生は丁寧に対応されていた。残された資料の中に、この時の箕輪先生の心情が綴られたメモがある：

「全国から集まる3万5千のサーチライト、禁止署名の整理に夜も眠れない。」

全国の星仲間の思いを環境庁に陳情し、光害の問題で、国の厚いカベを動かし、世の中の意識を変え、大きな成果を上げてこられた箕輪先生。尊敬する箕輪先生への感謝の気持ちを込めて報告させていただいた。報告にあたり、先生の自費出版著作や川崎天文同好会の年史などを参考にした。



小川 誠治

（左は箕輪敏行先生、2011年8月21日撮影）